

人間の精神的な能力には、知る能力である知性（知性と理性は少し違うのですが、ここでは理性と言っておきます）と、知った物を選択する、あるいは選択しない能力である意志があります。例えば、人がミカンを見て、「これはミカンだ」と知る。これは理性の働きです。次に「食べたい」と思いそれを手にとって食べる。これが意志の働きです。あるいは「食べたくない」と考えて食べないなら、それも意志の働きです。このようなまず理性でものを知って、次に何をすべきかを判断し、その後その判断に従う、もしくは従わないのが、人間が自由であることの証拠です。つまり、自由とは選択の能力で、意志と理性を備えている者だけが持つ能力だということです。



このように自由に選択した行動は、善か悪の評価を受けます。自由がなく、他者から強制されてした行いや、意識のない状態でなされた行いは、善でも悪でもありません。そして、善と悪を判断するために、具体的な行いを判定する基準があります。それが道徳法と言われるものです。

この道徳法則についてカントとそれ以前の哲学とでは大きな考えの違いがあります。つまり、ギリシア人と中世のキリスト教哲学者は、人間も自然の一部だから、ちょうど自然が物理の法則によって支配されているように、人間もその行動を規定する道徳法（これを自然法と呼ぶ）が与えられていると考えていました。実践理性とは、その道徳法則を知って、自分の一つ一つの行動に当てはめて、行いの善悪を判断する理性である、と。

これに対してカントは、この道徳法則は人間が作るとしたのです。すなわち、実践理性は「自己の内から自己を律する法則を生み出すことができる」と言うのです。理性が自ら道徳法則を作るのならば、道徳法則は外から与えられたものではないということになります。それゆえ、実践理性は他のいかなるものにも依存しない、自律的なものということになります。実践理性の判断を実行に移す意志も同じく自律しているのです。

カントは道徳的に高い理想を持った人でした。彼によれば、実践理性が示す道徳法則とは「あなたの意志の主観的格率がつねに同時に普遍的立法の原則としても妥当するように行為せよ」ということでした。平たく言い直すと、「あんたがせんとあかんと思うことが、いつも誰にでも通用することやと思うようなことをせえよ」となります（これでも難しいですね）。このことは人間に下される無条件な命令で、「定言命法」と呼ばれる。そして、善い業を行うときは、「ただただ義務やからという理由でせんとあかんで」とうるさく言っていました。シラーというドイツの文人はこれを皮肉って、「ああ、わしは友達がかawaiiそうやと思たから、彼を助けてしもた。友達を助けるのは、義務やということをお忘れとった。何と不幸な人間や、わしは。すまんのう」と嘆いてみせたそうです。

このようにカントが意志や実践理性の自律を主張したのは、当時流行していた、イギリス人のベンサム（1748～1832）を代表とする功利主義の倫理に対抗するためでした。彼らは「快を与えることが善で、苦を与えることが悪じゃ」と言います。これなら、行為の善悪は、外にあるものによって与えられる快苦に依存することになります。カントが主張したかったことは、「善悪は人間の精神以外にあるものに左右されない。ただ自分の思いがそれを決めるのだ」ということです。それは高邁な態度ですが、人間の精神が何者からも独立しているというのは間違だと言わざるを得ない。完全に自律しているのは、絶対的な存在だけで、人間は絶対者ではないから。では、人間の行為の善悪は何に依存す

るか。それは、快苦にではなく、人間の本性に与えられた道徳法にです。

古代と中世の哲学では、道徳の出発点に「善」を置きます。この場合の「善」とは、道徳的な善よりももっと広い意味で、つまり万物がもつ良さを指しています。つまり、意志は自分の外にある善に引かれるという事実が出発点だとするのです（「善とはすべてのものが欲するもの」とアリストテレスは『ニコマコス倫理学』という本の冒頭で定義しています）。だけど、意志が善に引かれる前に、理性がその善を知らねばなりません。つまり、理性も意志も、まず自ら動く前に、外の世界（自然）が存在し、それを認識せねばならないと考えるのです。ということは、理性も意志も自律していない、自分以外の存在に依存していることになります。これをカントがひっくり返したのです。

カントの人間精神の自律という考えは、実はデカルトの考えから始まっている。デカルトがすべての原理としたのが「我思う、ゆえに我有り」でした。彼は、この原理から「私とは思考だ」という結論を出しました。しかし、考えるものは精神です。だから、「精神とは思考だ」と定義されます。でも人間は精神と体からできている。それでは体はどうなるのか。ここでデカルトは「体は広がりをもつもの（延長）だ」と定義しました。もし精神が思考で、体が広がりであるならば、この二つは全く互いに関わりのない、水と油のようなものになります（これを心身二元論、あるいは物心二元論と呼ぶ）。この考えはそれまでの考えと大きく異なるのです。古代中世の哲学では、デカルトが精神と呼んだものは、魂と呼ばれていました。魂はラテン語では anima と言います（動物は animal と言われるのはそのため）が、それは生物体を生かしている原理という意味です。魂は体と密接な関係にあるのです。人間の魂は、他の動物とは異なり、物質に依存しない働きができるので、霊魂と呼ばれます。

この魂の考えは、現代医学でも正しいとされると思います。それは心のやまいという病気が、投薬とカウンセリングの二つの手段を併用しながら治療されることからわかります。もし、精神が体とまったく関係ないなら、心の病の人に薬を与えても何の効果もないでしょう。また精神的な部分が存在しないなら、カウンセリングは役に立たないはずで、ちょうど風邪の人にカウンセリングをしても治らないように。また、体が疲れると心も元気がなくなる、心が明るいとい体も元気になる、というような経験をしませんか。またもし医学的な面から関心があれば、精神科医としての長い治療体験をもつ、京大名誉教授の木村敏先生の全集を読んでください。

ともかく、人間のもつ精神的な部分と物質的な部分を完全に分けたデカルトは、「魂」という言葉を使うのをやめ、「精神」という言葉を使うことにしました。他方、体は「広がりをもつもの」だから、そのほかの物質世界に溶け込みます。このデカルトの物心二元論の線上にあって、カントはこの世界を、物理法則に支配される物質世界と、いかなる法則にも束縛されない精神の世界の二つの世界に分けてしまった。前者は、純粋理性で知り得る現象の世界、後者は知り得ないもの自体の世界です。

その結果、精神は物質（あるいは自然）と対立するものと考えられるようになります。精神は、物質世界（自然）に囲まれている。精神は科学を進歩させて、この包囲網を脱して逆に自然を支配しないといけないという考えもここから出てきます。このような考えは古代や中世にはありませんでした。

また物質と精神のどちらが優越するかという問題も出てきます。物質によって精神世界も説明できるとする唯物論、逆に精神がすべてを説明できるとする観念論という相反するよう見える二つの考えもここから生まれてきました。

こうやって近代の哲学はますます混乱を深めていくのです。